

日本語教育から見た日本語の指示詞表現(2) — 文脈指示の「その」と「そんな」 —

深見兼孝

はじめに

本稿は、日本語教育から見た日本語の指示詞表現に関する研究の、いわば各論にあたる最初の試みとして、日本語の指示詞「その」と「そんな」の違いに焦点を当てたものである。

問題点

拙稿(2004)で筆者は、日本語の指示詞が朝鮮語に比べ、より文脈依存的な用いられ方をすると主張した。そして、その一例として、「この、その、あの」は「モノ」という本来的な存在論的意味から逸脱した用いられ方をすることが多く、その被修飾語である名詞のコト的な意味に拘束されにくいことを指摘した。また、今後の課題として、どの程度そうなのかを調べる必要がある、とした。

拙稿(2004)は、この現象を「緩やかな規則ないしは傾向」(p.36)として理解していた。しかし、木村(1983)は、「こんな」と「この」の文脈照応を取り上げ、両者の互換が不可能な場合を、次のように規則化している。これにより、拙稿(2004)が傾向とした現象の一部に規則が存在することが明らかになった：

- 1) 後方照応の場合、「『こんな』の出現はつまり『内容』の後出を予定するものであり…『コンナ+名詞』がいずれも現象文的なものの中に収まっているという構文的特徴」(pp.74-75)があり、「『コノ+名詞』が現れる環境は…前置きとしての題述(従属)文であり、このことによって…話し手は本来自己の概念内に留まる事柄を…先取りした形で解説の対象たる主題の位置に予め繰り上げる」(p.78)
- 2) 前方照応の場合、「『発言』の内容に前方照応しつつ『発言』の動詞¹⁾に対して目的格の位置に立つ指示表現としては、『コンナ+名詞』が適切である」(p.80)が、それに当たらない場合は、「必ずしも『コンナ+名詞』のかたちを照応形式に充てる必要はない」(p.81)

1)、2)から、被修飾語の名詞がコトの意味を持っており、かつ指示物が命題や思考内容(命題の一種)であるので、本来「こんな」が予想されるにもかかわらず、その統語的・テキスト的環境によって、「この」が使用される(あるいは使用されうる)場合がある、と言える。

焦点を絞るために、上の2)だけを取り上げてみる。木村(1983)は、「『発言』と『発言』動詞に関わる照応の問題は…『ソ』『ア』両系にも通じて言える」(p.82)としてい

るので、「ソ系」の「その」と「そんな」が前方照応している場合のみに限定すると、2) は次のように言い換えられる：

前方照応の場合、「発言」の内容に前方照応しつつ「発言」の動詞に対して目的格の位置に立つ指示表現としては、「そんな+名詞」が適切であるが、それに当たらない場合は、必ずしも「そんな+名詞」のかたちを照応形式に充てる必要はない。

そこで問題は、木村（1983）が規則化した条件以外の部分、すなわち「それに当たらない」場合はどうなっているか、であろう。具体的には、次のような問題が考えられる：

ア) 「その+名詞」と「そんな+名詞」はどちらがよく用いられるか。

イ) 「そんな」の修飾を受ける名詞と「その」の修飾を受ける名詞はどのくらい共通しているか。

ウ) 発言動詞とそうでない場合とで、イ) は変化するか。

イ)、ウ) は「その」が被修飾語である名詞のコト的意味に拘束されにくいことを証明するためのものである。また、ア) はその前提として、「その」と「そんな」の頻度を調べるためのものである。さらに、イ) に関しては、「その」と「そんな」の修飾を受ける名詞のパラエティーも調べることにする。

さて、木村（1983）は上の2) について、「『発言』動詞と『発言』の間に立って『発言』に照応する形式は、できる限りその…『発言』本来の用言的な姿を保ちつつ、それを『発言』動詞…に繋ごうとする。そのために選ばれたのが『コンナ』」（p.81）だとし、それは「こんな」が「意味の上で<さま>を担い、構文的には用言の形式」（p.81）だからだとする。木村（1983）は、発言動詞と結合する際の「こんな」が、引用に準じるか非常に近い性質を持っていると考えているようである。

ところで、木村（1983）は、「はい、そのはずです/いいえ、そんなはずはありません」を例に取り、「『ソノ』と『ソナ』の肯定表現と否定表現の相補的な分布」（p.82）に言及している。すなわち、「はい」に続く環境（肯定表現）に「その（はず）」が、「いいえ」に続く環境（否定表現）に「そんな（はず）」が用いられると言う。

上の木村（1983）の「こんな」に関する説明が、そのまま「そんな」にあてはまるとすると、「そんな」の引用的な性質と「否定表現」での出現の間には、関連があると考えられる。「発言」動詞に関わる引用は、その内容（命題）を後で容易に否定できる²⁾ので、話し手は、引用の時点でその命題が真であると判断していないと見てよい。したがって、「そのはずです」のように、命題が真であることを確信する表現としては、「はず」の修飾語として、命題が真であることを表さない「そんな」は不適切で、「その」が用いられるのだろう。逆に、「そんなはずはありません」のように、命題が真であることを受け入れない表現としては、命題が真であることを表さない「そんな」が適切となり、命題とは照応しない「その」は不適切なのだろう。

この考えが正しいとすると、「そんな」の引用的性質は、「発言」動詞以外の場合でもあ

る程度見られるのではないかと予想される。もしそうなら、「そんな」は、「その」に較べ、照応する命題が真であるとは確定されない文脈で用いられやすいと仮定できる。これは、エ)「そんな＋名詞」が「その＋名詞」と較べ、肯定形と結びつきやすい(結びつきにくい)かどうか

を調べればよいだろう。

ここで、「その」と「そんな」を比べた場合、意味的には「そんな」が「様態」の意味を担う分有標であると考えられるので、次のような予想が立てられる：

- ・ア) に関しては、「その＋名詞」の方が頻度が高い。
- ・イ) のバラエティーに関しては、「その＋名詞」の「名詞」の方が異なり語数が多い。
- ・エ) に関しては、「その＋名詞」と「そんな＋名詞」では前者の方が肯定形と結びつきやすい。

方 法

まず、「そんな」は「様態」を表すので、先行文脈で示された内容と照応すると考えて差し支えないだろう。しかし、「その」は内容的にはいわば「空」であるので、仮に「その＋名詞」の内容が、先行文脈に示されていたとしても、「その」がその内容と照応すると言えるかどうか慎重にならざるを得ない。とりわけ、会話において「その＋名詞」の内容が、対話者の発言において示されているとしても、「その」はその内容と照応するのではなく、「今のあなたの(話、考え…)」程度の意味ではないだろうか。もしそうなら、これは現場指示ではないかと疑われる。

この問題を迂回するために、まず、同一発話内に照応関係が成立する場合のみを取り上げる。資料は多様な表現を収集するために小説とした³⁾。したがって、地の文に照応関係が成立する場合も、作家の発話として同一発話内に照応関係が成立しているとみなす。

次に、前節のイ) のバラエティーに関しては、異なり語数を見ればよいだろう。また、エ) に関しては、「その(そんな)＋名詞」がその成分として機能している最小の節(単文を含む)の叙述形式を、「肯定形」とそれ以外の「非肯定形」に大別し、次のような措置を取る：

- A) 節末の叙述形式が現れていない場合はデータとして採用しない。ただし、以下のb) 参照。
- B) 「だろう」や「と思う」のような対命題モダリティを表す形式がある場合は、その後いずれもが「肯定形」である場合に限って「肯定形」とみなす。ただし、「その(そんな)＋名詞」が「思う」と呼応する場合(ex. その時…思った。)は、「思う」が「肯定形」かどうかを見る。そして、その「肯定形」とは、
 - a) 疑問詞がある場合、終助詞「か」およびその複合体「かな、なね」等がある場合、および否定の「ない」がある場合

- b) 「決して」や「～とは」や「～なんて」のように、通常は「肯定形」とは呼応しないと思われる形式がある場合（節末の叙述形式が現れていなくても、データとしては採用する）
- c) 形式上は「肯定形」であっても「？」で疑問であることが表示されている場合
- d) (肯定・否定を問わず)「命令形」
- を除くものとする。なお、二重否定形式は「か」系列の終助詞がない限り「肯定形」とみなす。

結 果

まず、全用例数は、「その＋名詞」が490、「そんな＋名詞」が54で、「その＋名詞」の方が頻度が高い。「その＋名詞」における名詞の異なり語数は286（対「その＋名詞」全用例数比58.4%）、「そんな＋名詞」における名詞の異なり語数は22（対「そんな＋名詞」全用例数比40.7%）であった。異なり語数の、おのおの対全用例数比だけを比較すれば、この差は危険度5%の水準で有意である（ $p=0.5617647$, $Z=2.49078515>1.96$ ）。このことから、「その」のほうが、「そんな」よりも多様な名詞と結合しやすいと言える。

次に、肯定形の節に現れる「その＋名詞」は439（対「その＋名詞」全用例数比89.6%）、「そんな＋名詞」は38（対「そんな＋名詞」全用例数比70.4%）であった。この差は危険度5%の水準で有意である（ $p=0.88014706$, $Z=4.29460565>1.96$ ）。このことから、「その＋名詞」は「そんな＋名詞」に比べて、肯定形の節の中に現れやすいと言える。

次に、「そんな＋名詞」が「発言」動詞と結合する場合を除いて見る。「そんな＋名詞」が「発言」動詞と結合するのは全部で6例だった（うち肯定形の節に現れるのが5例）ので、「そんな＋名詞」の総用例数は48（54－6）である。「そんな＋名詞」における名詞の異なり語数は22で、「発言」動詞と結合する場合を除いても変わりがなかった（対「そんな＋名詞」総用例比45.8%）。これを、「その＋名詞」における名詞の異なり語数286（対「その＋名詞」全用例数比58.4%）と比較すると、その差は危険度5%の水準で有意ではなかった（ $p=0.57249071$, $Z=1.68399534<1.96$ ）。したがって、「そんな＋名詞」が「発言」動詞と結合する場合を除いた場合、「その」のほうが、「そんな」よりも多様な名詞と結合しやすいとは言えない。また、「発言」動詞と結合する場合を除いた場合、肯定形の節に現れる「そんな＋名詞」は33（38－5）例であった（対「そんな＋名詞」総用例比68.8%）。これを、肯定形の節に現れる「その＋名詞」の用例数439（対「その＋名詞」全用例数比89.6%）と比較すると、その差は危険度5%の水準で有意であった（ $p=0.87732342$, $Z=3.64791825>1.96$ ）。したがって、「発言」動詞と結合する場合を除いても、「その＋名詞」は「そんな＋名詞」に比べて、肯定形の節の中に現れやすいと言える。

次に、「その＋名詞」と「そんな＋名詞」の名詞の部分と比較してみると、「そんな」の修飾を受ける名詞のうち、次の名詞が「その」の修飾も受けている（カッコ内は「その」

の修飾を受ける用例数対「そんな」の修飾を受ける用例数) :

こと (3:19)、ことば (2:1)、時間 (1:1)、状態 (1:1)、表情 (2:1)、ピラ (1:1)
「そんな+名詞」が「発言」動詞と結合する6例は、すべて名詞が「こと」であった。したがって、「そんな+名詞」が「発言」動詞と結合する場合を除くと、次のようになる:

こと (3:13)、ことば (2:1)、時間 (1:1)、状態 (1:1)、表情 (2:1)、ピラ (1:1)
このことから、異なり語数としては多くないものの、確かに「そんな」の修飾を受ける名詞のうち、いくつかは「その」の修飾も受ける、ということが分かる。また、その異なり語数は、「そんな+名詞」が「発言」動詞と結合する場合を含めても除外しても、変わらないと言える。

以上のことから、上で設定した問題に対して次のようなことが言える:

ア) 「その+名詞」と「そんな+名詞」はどちらがよく用いられるかに関しては、「そんな+名詞」が「発言」動詞と結合している場合を含めても除いても、「その+名詞」の方がよく用いられる。次に、イ) 「そんな」の修飾を受ける名詞と「その」の修飾を受ける名詞がどのくらい共通しているかに関しては、少数ながら共通の名詞が確かに存在する。また、それはウ) 「発言」動詞とそうでない場合とで変化しない。ただし、「そんな」を受ける名詞と「その」を受ける名詞のバラエティーに関しては、「そんな+名詞」が「発言」動詞と結合している場合を含めると、「その」を受ける名詞の方が多様であると言えるが、「そんな+名詞」が「発言」動詞と結合している場合を除外すると、多様性に差があるとは言えない。また、エ) 「そんな+名詞」が肯定形と結びつきやすい(結びつきにくい)かどうかに関しては、「そんな+名詞」が「発言」動詞と結合している場合を含めても除いても、「その+名詞」ほど肯定形と結びつきやすくない⁴⁾。

議 論

「発言」動詞が述語である場合を含めると、「そんな」を受ける名詞のうち、「こと」の出現回数が19で、全用例(述べ語数)54の1/3以上を占め(対全用例数比35.2%)、「そんな」を受ける名詞にかなり偏りがある。これは、「そんな」の様態的意味と「こと」の文字通りコト的意味が相通じ合っているためであろう。したがって、全般的には「そんな」はある程度被修飾語である名詞の選択に制限を加えていると言える。

しかし、「発言」動詞を除いた場合、「その」を受ける名詞と「そんな」を受ける名詞の多様性に差がなかった。「そんな」の頻度が低いために確かなことは言えないが、十分な用例が収集されれば、「その」を受ける名詞と「そんな」を受ける名詞にさほど大きな差はないのかもしれない。また、6個の名詞は「その」の被修飾語にも「そんな」の被修飾語にもなっていた。とりわけ、「そんな」の被修飾語として頻度の高い「こと」(全用例数48のうち「こと」の出現回数が13で、対全用例比27.1%)が、「その」の修飾語としても使用されているということは、「その」が修飾する名詞のコト的意味に拘束されにくいと

いう傾向を裏付けていると言える。

さて、データにも「そんな＋名詞」が非肯定形の節に現れ、「そんな」の照応する命題が真であることを否定・拒否したり、疑問視したりする用法が見える。次の例を見られたい。

(1) 朝起きて、夜が明けたことを呪う餓えたものたちは、永久の夜に憧れ、死に瀕した人間はデーモンを信じ、生活力のない臆病者が悪魔の物語を創りだす…そんな馬鹿ってあるものか！(KAB09214)
この例文の話者は「名刺」で、人間を憎んでいる。「そんな」と照応する「朝起きて…造りだす」は人間の所業である。「名刺」はこのような人間の所業を「馬鹿」なことと断罪し、拒否しているのである。続いて次の文を見られたい。

(2) ほくは夢を見ていたのでしょうか？いや、そんなはずはありません。(KAB02606)

この例文では、話し手自らが設定した疑問、「ほくは夢を見ていた」か、に対し、「そんなはずはない」と言ってその可能性を打ち消すことにより、「ほくは夢を見ていた」という命題の受け入れを拒否している。

ここで、すぐ上の例文で「そんな」が照応するのは、話し手自らが設定した疑問である。疑問であるから、その内容（命題）「ほくは夢を見ていた」の真偽は確定されていない。命題の真偽が、取り込みの時点では確定されておらず、保留になったままであるということは、その命題が話し手にとってあくまでも外部のものであることと同じだとみなしてよいだろう。このように、「そんな」が照応する命題が真偽未確定であることが、疑問文で示されることがある。次の例も同様である。

(3) 「Y子ですって？」と問い返すと、「御存じじゃないのですか、そんなことはないでしょう。(KAB09703)

(4) 「おっしゃることはよくわかりますが、これは絵具の売れる仕事じゃないですよ。第一、一枚の画をみて、うちのクレパスを使ったのか、よそのクレパスを使ったのか、そんなことはわからないじゃありませんか。(HAD15515)

次の例でも「そんな」が照応する命題が真偽未確定であることに変わりはない。

(5) ナチが敗走しようが、聯合軍がリオンを奪回しようが、ファシズムが潰えて、所謂、民主主義が勝利をしめようが、そんなことは、私のあずかり知らぬことだ。(SIR14406)

この例文の「そんな」に照応する命題は、「ナチが敗走する」こと、「聯合軍がリオンを奪回する」こと、「ファシズムが消えて、所謂、民主主義が勝利をしめる」ことの三つであるが、「私のあずかり知らぬことだ」が示すように、そのどの命題の真偽も話し手にとって関心外であり、未確定のままである。

次の例では「そんな＋名詞」は肯定形の節に現れている。

(6) すると相手はたたみかけるように、「誰と？多分あなたの名刺とでしょう？」「そうです。」「ありがとう。多分そんなことだろうと思っていました。」(KAB09801)

この例は「Y子」という女性が誰と一しよにいたかが話題となっている。話し手は、そ

の相手を聞き手の「名刺」と予測しているが、疑問の形で提示しており、その真偽を確定していない。続いて次の例を見られたい。この例でも「そんな+名詞」は肯定形の節に現れている。

(7) 「じゃ、ほくみたいな人間がその他にもいるのですか?」「そう言っ言えないことはない。しかしその他人をあなたから区別することはほとんど不可能なんだから、あなた一人の固有な運命だとも言える。まあそんなことはどうでもいいことです。(KAB10106)

この例で、「ほくみたいな人間」というのは、裁判を逃れるために「世界の果て」に行かなければならなくなった人のことである。「そんな」が照応する命題は「世界の果てに行かなければならない人間は聞き手の他にもいる」と「世界の果てに行かなければならないのは聞き手だけの運命である」の二つであるが、「どうでもいい」が示すよう、その真偽はやはり未確定のままである。

これら(2)～(7)の例は、話し手は「そんな」が照応する命題が疑問形のような真偽未確定の形で現れ、話し手はその命題が真であることを拒否したり、疑ったり、あるいは無関心だったりしている。このような例は、「その」にはなかった。次の例では、「その質問」は「名前が何か」という質問と理解される。つまり、相手の質問「お名前は」は「何ですか」の省略と見える。疑問詞による疑問文なので、そもそもその命題の真偽は存在しない。

(8) 「お名前は?」ほかにも何か言われたようでしたが、その質問が胸にせまって、よく聞きとれませんでした。(KAB02216)

しかし、この例では、話し手はその命題を拒否したり、疑ったり、あるいは無関心だということ表明していないのである。また、次の例を見られたい。

(10) 「当然?なぜ当然なのか…その理由を述べなさい。」(KAB04509)

この例は裁判で、被告が「どのようにしてラクダを吸いこんだ」かについて、「当然、胸部の陰圧による」と主張したことに対し、裁判官がその理由を求めたものである。確かに、「なぜ当然なのか」は疑問文であるが、「その理由を述べなさい」という発言は、命題の真偽を問題にしてはいない。

このように、真偽未確定の命題を発話に取り込み、その命題に対して話し手が真偽を判断する(あるいは判断を放棄する)という用法は、「そんな」にしか見られなかった。これは、「そんな」の引用的性格の現れと言えよう。

「そんな」と被修飾語である名詞の間にさらに別の修飾語が入ることがある。その修飾語は、「そんな(+名詞)」が照応する事態に対する話し手の判断や評価を表している。次の例を見られたい。

(11) 電車を一台きり描いて筆を投げた子供は、ほくがたずねると「これはね、終点についたところなんだよ。みんなおいてしまったんだよ」たいいそんな巧妙なとっさの知恵をはたらかせて逃げようとするが、こちらも負けてはいられない。(HAD13801)

この例では、「電車を一台きり描いて」もう描くのをやめてしまった子供が、話し手の質

問に対して即時に行った言い訳に対し、話し手は「巧妙なとっさ（の知恵）」と評している。また、次の例を見られたい。

- (12) つづいてY子が、「ほんとうに、あなたのいうことはなんでも立派ね。」「そうとも、こういう問題は、哲学的に考えなければいかん。」と名刺が得意になり、「そう言われただけでも、本当にそうだと思うわ。」そんないやらしい調子でY子は本当にそう言ったのです。(KAB09205)

この例の、「いやらしい（調子）」も、「Y子」の話しぶり（おそらく、名刺に対するおべっか、あるいは媚を売るような話し方なのであろう）に対する話し手の評価ないし判断である。このような例は非肯定形の節でも見える。次の例を見られたい。

- (13) 輸出向きとかなんとか、そんな大げさなことじゃない。(HAD20512)

この例は、海外に送るための子供の絵画の品評会での審査委員の発言である。彼は出品された絵のうち一枚を落選にしたが、その理由として上の発言をしている。その絵は非常に下手で、輸出に向いているかどうかを判定する以前の問題だと言うのである。つまり、その絵のレベルでは、輸出に向いているかどうかを判定するのは「大げさな（こと）」と言うのである。「大げさな（こと）」は、その絵の下手さから、話し手が輸出に向いているかどうかを判定することに対して下した判断だと言える。また、次の例を見られたい。

- (14) 彼等は、お前と同じように、一人で殺されるのを待っていたらしいな。そこには英雄の孤高、英雄の死という、くすぐったい悦びがあるからな。ところがだ、ヒトラーはちゃんとそれを見抜いていた。奴等を無名のまま集団で殺した。ヒトラーはそんな文学的、感傷的な死に方を彼等に与えてやらなかったのさ」(SIR19505)

この例における「文学的、感傷的な」は、レジスタントたちの「英雄的な」死に方を形容している。

このように、「そんな」と名詞の間に入る修飾語は、「そんな」と照応する事態がどのような事態であるかを表している。これも、話し手が「そんな」によってその事態をそのまま取り込むことで可能である。やはり、「そんな」の引用的性質による。「そんな」と照応する事態がどのような事態であるかというのは、まさしく「様態」である。「そんな」の引用的性質は、その「様態」という意味に基礎をおいているのである。

さて、逆に言うと、「そんな」と名詞の間に入る修飾語が形容する事態は、「そんな」によって文脈に示されることになる。「その」の場合も、その修飾語である名詞との間に別の修飾語が入ることがある。しかし、その修飾語の表す有り様に対応する事態が文脈で示されるとは限らない。次の例を見られたい。

- (15) 僕はうなだれて、朝の光に焼けている敷石の上の自分の裸の足、その短くて頑丈な指を見つめた。
(SII08811)

この例の「短くて頑丈な」というのは、「僕」の「指」を形容しているが、何らかの事態から、話し手が「短くて頑丈な指」と判断ないし評価しているわけではない。その事態は文脈に現れていない。

日本語教育との関わり

従来「そんな」は様態を表すと言われてきた。それは正しいだろう。しかし、「そんな」には、それに裏付けされた引用的性質があり、先行文脈で示された命題をそのまま発話に取り込むという働きがある。これは「その」との大きな差である。この点は日本語教育において見過ごせない。なぜなら、「そんな」の引用的性質は、いわば様態の具体的現れの一つであって、実際に学ばなければならないのは、この後者の方だからである。これは、例えば動詞の具体的な用法を身につけなければ、その動詞を習得したとは言えないのと同じである。したがって、日本語教育において、「そんな」に関して一定の時間を配当すべきである。また、それ故に教授法や教材の開発が必要である。

次に、「その」と「そんな」は頻度が異なり、非肯定形との結びつきの程度にも差があり、(正しく把握できるかどうかは別にしても)意味に違いがあるのは予測しやすい。ところが、発言動詞の場合を除くと、「その」の修飾を受ける名詞と「そんな」の修飾を受ける名詞の間に、多様性に関して差があるとは言えなかった。また、「そんな」の修飾を受ける名詞の中には「その」の修飾も受けるものがあつた。この問題はさらに研究が必要だが、「その」の修飾を受ける名詞と「そんな」の修飾を受ける名詞の間に、明確な線引きをすることができないのは確かだろう。修飾語が被修飾語の選択に制約を与えるのが、通常だとしたら、「その」と「そんな」の修飾を受ける名詞の「違いのなさ」は、「その」と「そんな」の違いに関して、学習者を混乱させる可能性が充分にある。この点も充分注意しておく必要がある。

結 論

日本語の指示詞は、品詞・指示物の存在論的意味・指示の領域によって区別され、体系をなす。従来の(外国語との対照を含む)日本語学、日本語教育では指示の領域が重点的に取り扱われてきた。しかし、他の二つに関してはまだ研究が乏しいように思える⁵⁾。本稿で見た「その」と「そんな」の違いは、基本的に「この」と「こんな」、「あの」と「あんな」についても言えると思われ、指示物の存在論的意味にかかわる事項だと思われる。今後さらなる研究が必要とされる。

注

- 1) 木村(1983)は『『発言』(の)動詞』として、「言う」「つぶやく」「思う」「書く」「尋ねる」「考える」「しるす」などがあるとしている。そして、これらの動詞の表す行為は、「口頭(音声化)による発言であるか、記述(文字化)による発言であるか或いは思念による内的発言のいずれかであり、いずれも言語行為の一種である点において一致する」(p.80)と言う。

- 2) 例えば次の例（筆者の作例）を見られたい。この文の前半「彼は彼女が先生だと言った／思った／書いた」は、引用の内容である「彼女が先生である」を含意しない。
・彼は彼女が先生だと言った／思った／書いたが、彼女は先生ではなかった。
- 3) 資料は以下の通りである。本文中にはカッコ内の略号と五桁の数字で該当の文のページと行を示した（上三桁がページ、下二桁が行である）。
安部公房『壁』新潮文庫あ-4-2. 新潮社1969年. (KAB)
遠藤周作『白い人』：小田切進（編）『日本の短編小説—昭和(下)』潮文庫97D. 潮出版社1973年. (SIR)
大江健三郎『飼育』：大江健三郎『死者の奢り・飼育』新潮文庫お-9-1. 新潮社1959年. (SII)
開高健『裸の王様』：開高健『パニック・裸の王様』新潮文庫か-5-1. 新潮社1960年. (HAD)
- 4) ただし、「そんな＋名詞」が肯定形と結びつく用例数の、対「そんな＋名詞」全用例数比は、「発言」動詞と結合している場合を含めると70.4%、「発言」動詞と結合している場合を除くと68.8%だったので、「そんな＋名詞」自体が肯定形と結びつきにくいとは言えない。
- 5) 「指示の領域」以外の研究としては、庵（1995）、岡部（1995）を参照されたい。

言及した文献

- 庵 功雄（1995）「ソノNとソレ—指示代名詞の分離可能性—」：宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』pp.632-637. くろしお出版.
- 岡部 寛（1995）「コンナ類とコウイウ類—ものの属性を表す指示詞—」：宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』pp.638-644. くろしお出版.
- 木村英樹（1983）「『こんな』と『この』の文脈照応について」『日本語学』2-11, pp.71-83.
- 深見兼孝（2004）「日本語教育から見た日本語の指示詞表現(1)—朝鮮語対訳から見た表現上の特徴—」『広島大学留学生教育』8, pp.25-36, 広島大学留学生センター.